

分科会5 充実させよう、薬剤師の生涯学習 —応えられる薬剤師となるために—

W-05-03 生涯学習 ～薬剤師の場合・医師の場合～

ひらい みどり

神戸大学医学部附属病院 教授 薬剤部長

プロフェッショナルとして生涯にわたり研鑽を続け、提供する医療水準を一定に保ち、さらに優れたものを目指すことは、すべての医療従事者に課せられた責務である。現在「医療の水準」はもとより、「医療の質」「患者・医療者の安全確保」などに対する社会からの期待が高まっており、特に医師の場合は知識不足・技術の未熟は言うに及ばず、コミュニケーション能力不足が、患者と医師間の信頼関係構築に不全を生じ、場合によっては医事紛争に発展する場合もある。国民は、安心して医療を受けるために、医療従事者が不断に学習し、知識・技能・態度の向上に研鑽する姿を「見える形で」求めている。

医学的知見の膨大な集積と医療技術の進歩に追いつくだけでも、大変な労力が必要であり、あらゆる機会を捉え、様々な手段を使った学習を我々は行わねばならない。さらに、最新知識・技術のキャッチアップだけでなく、それぞれの専門性に応じた新たな情報構築を行うことが、医療の発展に貢献するということを常に忘れてはいけない。

医師の生涯教育はまず学会主導で始まり、各学会が認定医・専門医・指導医といった制度を導入、学習単位と試験によって認定を行ったあとは、資格を維持するために一定条件の学習・研鑽を義務付けている。日本医師会は昭和59年より生涯教育推進に取り組み始め、学習を促進・支援するために昭和62年に日本医師会生涯教育制度が発足した。その後平成6年に単位制が導入され、平成22年には生涯教育制度について、国民からより評価が得られるように、制度の工夫・改善を行い、単位あたりの学習時間やどのような内容を学習したかを明確にすることとした。さらに、自己学習には評価を導入し、例えばe-learningによる問題解答では一定以上の正答率を得た場合に単位が取得できる、といった制度に改訂した。医療は専門化・細分化の傾向にあり、専門医の輩出が進んではいるが、一方で日常診療における一般医家、特に開業医の場合には、多様な疾患を診断・治療する能力が求められる。こういったプライマリケア領域での診療の質を、客観的に把握できる指標の開発が求められており、指標に基づいて自己の学習目標を明らかにし、目標達成への動機を維持することが検討されている。

薬剤師の生涯教育については、日本薬剤師研修センターが平成元年に設立されて以来、3万人を超える認定数を誇っている。また各地に生涯教育プログラムを提供する大学や団体が数多く存在しており、それらを評価するための第三者機関として、薬剤師認定制度認証機構が平成16年に発足している。各種職能に関する認定薬剤師の制度は、日本病院薬剤師会や医療薬学会などが進めている。日本薬剤師会は平成21年4月に「薬剤師に求められるプロフェッショナルスタンダード」を公表した。これまで「講義受講中心」の受け身の学習に対して単位を付与していたものから、目標設定に基づく積極的な学習へと、画期的な変化が生じたことになる。学習動機は個人で異なるとしても、そのモチベーション維持のために段階的な目標をしめすことはきわめて有用である。

知識は獲得した瞬間に古くなる、という運命にある。たんに知識の量を増やすだけでは、全くもって労力の浪費であり、知識は活用して初めてその価値が出てくるものである。資格取得ももちろん結構であるし、知識はあるに超したことはないが、知識をため込むだけで満足しては、医療人として生涯学習の効果が現れないだろう。いかに学習したことを活用するかを常に考え、それを実践するとともに、できれば新しい情報を自ら作り出す努力をする必要がある。医療の場において、解決されていない問題は山積しており、気づいた人間が解決のための努力、即ち研究をしていくことが望まれる。疫学研究や調査研究などのいわゆる「ドライな」研究が市民権を得てきたのは、そこでの成果が臨床の問題解決に直結することを、医療従事者が気づいてきたからにはほかならない。